

二代真柱様と相撲

二代真柱様は昔からよく相撲をとっておられたようである。平木一雄氏の『おやさと・いまむかし』に「明治45年の春、三島小学校へ御入学の真柱様は友達を誘ってよく野球をなさったと聞いているが、家庭にあつては相撲をお取りになったらしい。」という記述がある。このエピソードとして当時学生で、休暇中はお玄関で青年づとめをしておられた鈴木亨氏が昭和53年創刊の『思い出』の中で「大正5年正月に御造作中の管長邸ができあがり、その新居にお移りになった。今年12歳に御成人遊ばした若様もなかなかのヤンチャ(腕白)であられた。時々お玄関の日本間で為信先生(中山為信御分家)と相撲を取りなされたが、しかし痛くてもお泣きになることはなかった」と語られている。また、平木氏は池田大教会8代会長の宮田爽美氏から次のように聞かされたとある。

「大正5年、10歳の時。芦津大教会四代会長、井筒貞彦氏に『大和へ行こう』と誘われて、ついて行ったのが管長邸でした。二人の顔が会うなり、『相撲とろか』となり、すぐ裏庭へついて出ましたが、そこからは梶本宅や山沢宅が見え、その北に別席場が東西にならんでいましたな。そんな場所に、砂混じりの土を奇麗に盛り上げた立派な土俵がありました。すぐ跳になり着物のままで、いきなり四つに組んでもつれあいが始まるんですよ。」

天理中学校相撲部の始まり

大正10年には天理中学校に土俵があった。学校の裏の運動場の東北隅に雨ざらしになっていた。相撲部として独立した活動をしてはいなかったが、大運動会の当日に、教対天理中学校の角力紅白試合が催され素晴らしい人気を呼んだ。天理中学校はそれまでに東京の力士、大ノ浦関に依頼して稽古をつけてもらったため、技術が著しく進歩し、紅白試合に快勝した。選手の顔ぶれは矢島、中村、堀内、藤村、北川、喜藤、池野、藤井、筒井、中地、半田、坂井、能美、出口の14名であった。

大正13年、未だ部として独立を承認されてはいなかった。11月下旬に県下中等学校第1回角力大会が信貴山頂の新土俵で開かれた。最後の決勝戦はリーグ戦であった。結果は天理中学校6点、御所工業5点、奈良商業4点で大会最初の優勝校となった。優勝力士は足立、尾上、能美、三上、岡本の5名であった。

大正14年11月3日の体育デーを選んで新道場開きを行った。剣道場の西、柔道場の南隅にトタン屋根のある土俵であった。天理教校・天理外国語学校・天理中学校の対抗戦にみごとに優勝をした。その他にも種々の取り組みがあり、盛会裏に道場開きを終了した。1月27日には四十年祭記念大角力大会を催して人気を呼んだ。

大正15年、ついに正式に部として承認された。早速練習を開始したところ、ちょうど大阪相撲の一行が丹波市に巡業して来たので5月19、20日の両日、幕下力士の若柳、友の山、若椿の3名を招き、指導を受けた。いずれも親切丁寧にけいこを付けたので大きな技術の進歩があった。20日の興行には生徒の有志約600名が大挙観覧したため、急に相撲熱が校内で高まった。続いて暑中休暇の8月下旬に、5月に指導を受けた若椿氏を和歌山より招いて夏期練習を試みた。土俵はこれより前

東詰所の好意により中庭に移されて大いに便利になった。9月下旬、京都楽専の相撲大会に選手3名出場。関西学院には0対3で全敗したが天王寺商業には2対1で勝ち、中外商業には3対0で全勝した。10月上旬、第2回県下中等学校相撲大会が信貴山で開催された(前年度は中止)。結果は、天理中学校9点、御所工業5点、吉野工業1点という好成績で優勝旗を再び手にすることができた。優勝選手は荒井、能美、小林、松村、島崎の5力士であった。夜には盛大な歓迎提灯行列が行われた。なお、第1回大会の優勝旗は天理中学校が貰い受けた。

昭和3年10月18日の校主管長様御結婚当日、天理中学校、教校、外語の三校総合相撲大会を挙行し、その結果、天理中学校の岡林が優勝、山下が二等となった。10月下旬、大阪商大の関西中学校相撲大会に参加、予選で西野田職工学校と今宮職工学校には難なく勝ったが、大会の優勝校、御影師範に負け、合計8点しか得られず準決勝戦には出場できなかった。

昭和3年10月30日、勅語下賜記念日に大会が開かれた。試合は年級毎にリーグ戦を行い、優勝を争った。外語、教校、天理中学校の三校対抗試合には、この年も天理中学校が覇権を握った。

昭和11年に、柚之内に鉄筋コンクリートの新校舎(今の天理高校)ができ、それに伴って土俵も校長室のすぐ南側に四本柱の上に屋根のある、どっしりとした土俵ができた。昭和12年6月20日に二代真柱様が御臨席され、横綱双葉山と十両の双見山の一行が来場し、土俵開きを行った。この時の様子を天御津会社社長、西村静雄氏は次のように語っている。

「儀式は土俵の中央に砂を盛り上げ、それに御幣がたてられていて、諸井慶五郎校長が祝詞を奏上、盛り砂を鍬で三回振って平らにならされた。時間になると外語の寄宿舎でまわし一つになった双葉山と十両の双見山が下駄履きで入ってきて、土俵の上で四股を踏んだ。周囲は生徒たちだけでなく、地方の好角家が大勢観戦にきていてとても盛大であった。数名の生徒が双葉山に突き掛かるところころ転がされ、爆笑が起こった。自分は双見山にぶつかって押し出した。校舎の屋根の上からも大勢が観戦していた。式が済んだあと、真柱様は『お前、相撲を見てやれ。』と仰せになって天中何代目かの部長をつとめることになった。」

真柱宅の土俵

昭和6年に五十年祭を前におやしきの建物が配置換えになった。それにつれて土俵も一時姿を消していたが、昭和13、4年ごろにお宅の庭の中に新しい土俵が造られた。二代真柱様は、お玄関の青年たちを相手に相撲に興じられていた。第二次世界大戦後は芝生に変わっていたが、八十年祭後の昭和44年3月10日、新しくできた土俵の四隅に清めの砂を置き、周囲に十数人の青年が取り巻く中で、大幣行事があつて、本格的な土俵開きがあった。そのあと直ぐ、廻し一つになって取っ組み合いが始まった。この土俵も昭和53年頃には花壇になっていたようである。

参考文献

平木一雄『おやさと・いまむかし 75年の思い出』自家版(天理時報社)1997年10月
『天理中学校三十年史』天理中学校発行、昭和5年4月